

## 盤珪下の普浚通要と禪岩文心

加藤 正 俊

本稿はたまたま遇目した史料によって知ることを得た盤珪永琢の二人の弟子、普浚通要と禪岩文心の伝記の紹介である。

### 一、普浚通要

家蔵の道者超元(？～一六六〇)の墨蹟の中に次ぎのようなものがある。



通要

坐臥経行  
不要毀兮

道簡漢  
不要讚  
道者元

筆者は長年この書幅は、道者が弟子に与えた道号、並びにその頌であろうと考えていたが、『南山道者禪師語録』を一覧する機会があり、その理解の誤りであることに気づいた。道者の語録の偈頌の項を繙くと、以下のような偈が並ぶ。

示通宗

言言諦理、句句朝宗、佛法無多、聲前相逢、

示通震

一震玄雷、十方電光、毘盧頂印、箇箇圓通、

示通默

將來無相貌、萬象本歷然、堅密金剛體、森羅演默傳、

示通榮

大道莫留言、通身不可傳、花開正眼底、一咲自天然、

これらはすべて道者のもとで新しく出家した弟子に与えられた法諱であり、道者の弟子の系字（法諱の上の一字）が「通」字であることを知ることができる。これらは一種の安名といってよく、号頌のように一つ一つの法諱について道者が偈頌を授けている様子がうかがえる。

所掲の通要も、道者の語録には収録されていないが、前述の通宗、通震、通默、通榮等と同じく道者の剃度を受け、通要と安名された弟子の一人と考えられる。

道者は慶安四年（一六五二）に長崎に渡来し、万治元年（一六五八）には中国に回棹しているので、日本滞在は足かけ八年に過ぎない。道者が去った後、これらの弟子達はどのように身を処したのであるか。

道者のものには当時臨濟、曹洞の僧籍を有する俊秀の徒が参集していたが、道者の帰棹後は、それぞれ出身の宗派の寺院、師僧のもとに帰り、後に大成して一派の重鎮となった人が多い。その例は殊に曹洞宗に著しく、中でも独庵玄光、悦巖不禅、雲山愚白、普峰京順などは知られる。既に一山の住持であつた鉄心道印も、道者に謁して大きな影響を受けている。

臨濟宗では盤珪永琢が最も知られ、無門原真も道者の警咳に接した一人である。古月禅材の師・賢巖禅悦も、多福寺住山後道者を訪ねて親交を結んでいる。臨濟宗の出身ながら後に道者の法伯隱元隆琦の黄檗派に転じた人に、木庵下の慧極道明がある。

これらの人々には帰るべき寺院、寄るべき師匠があつたが、道者剃度の弟子達は、道者の帰棹によつて寄る辺を失つてしまふ。上述の五人の道者の弟子達のその後は全く不明であるが、僅かに通要の晩年をさぐることを得たので以下に述べてみたい。

盤珪の行状を述べた『大法正眼国師行業曲記』は前後二部よりなり、前の部は「行業曲記」、後の部は「贅語」と題し、盤珪の逸話や言説が記される。編者は盤珪手度の弟子山堂知常で、延享四年（一七四七）の編、その二年後山堂は八十二歳で示寂している。

その「贅語」の七〇に、次ぎのような記述を見ることができる。

①「師、弟子に通要という者あり、綿密の士なり。而して瑣細の作務に辟す。遺粘を碓房に拾ひ、流菜を水辺に収む。師これを戒しむ。要、動もすれば庫下を搜索し。廊廡を尋検して、至らざるなし。師これを擯す。要、教大梁に頼りて懺謝す。年所を歴ると雖も而かも師これを容さず。要、哀求して漸く衆に入る。要、出て師を礼す。師笑つて曰く、見ざることまた久し、老脊弥々瘻む、と。人衆多く其の真慈実承の殊勝なるを感ず。抑も惟うに、要の器小なるを以

て、師慈悲もて提擧して、肯て遷さざるか」(原漢文)

文中に出てくる師は即ち盤珪永琢であり、教大梁は盤珪の後を継いで網干の龍門寺二世となった、大梁祖教のことである。この一文によって道者の帰棹後、通要は曾て道者の会下で同参の盤珪の門下に入り、龍門寺にあつて綿密な日常を送っていたこと、通要の器量の極めて小なるため、ややもすれば瑣細な作務に辟より過ぎ、盤珪によって擯され、容易に許されなかったこと、寄る年波のため、通要の老脊の弥々曲がつてしまつてゐることなどを知り得る。

曾て道者が通要の法諱に対して述べた、「坐臥経行、這箇の漢、毀ることも要せず、讀めることも要せず」の一句が思いあわされる。尚お通要の道号普渡については、赤尾編『盤珪禪師全集』三四一頁を参照されたい。

さらにもう一つ『正眼国師逸事状』三六の一文を紹介しておこう。同書は大洲如法寺五世逸山祖仁の弟子、大鼎禪圭(江戸下谷済松寺)の編になるものである。

②「禪仙、師の左右に在りて、弁事、仙陀婆の如し。一日、命じて急に之を擯せしむ。人、真の由を図ること莫し。一日、復た通要を擯せしむ。要は道者の会下に在りて、師と久要有り。然して齡七旬に及ぶ。進修懈らず。是れ賞すべくして、之を罪す。蓋し為にする所有つて、以て然らしむるか。皆其の病根に針灸す。其の自悔自懺して、以て大いに道念を増す。師の大悲心、心に銘し骨に鏤み、徳を感じて忘れず。其の機密、誰か敢て之を窺わん。

夫れ人の知る所を知る。之を有思量智と謂う。不生の仏智は、般若に讃する所の無分別智なり。今相似の禪師、経録を講演するや、辯濶は演史の如し。輕心浮識を以て、瞎禿をして白地に踊躍せしむ。智人は安ぞ敢て之を首肯せんや。師常に衆に示して曰く、須く人を知るの眼を具すべしと。夫れ是れ之を謂うか。」(原漢文)

如上の一文に多少の説明を加えると、禪仙は盤珪下の大随祖璧の法嗣・大仙禪仙（？～一七三八）を指す。京都八幡の慶春庵（廃庵）の住持。

通要はここでも盤珪によつて續せられている（前項引用文中のことと同じ事件を指していると思われるが）。しかし編者大鼎の筆は通要に同情的である。大鼎は盤珪と通要との間には、久要（前からの約束）があったとする。（「歳をとつたら俺が面倒みよう」というような話は、余りにも下世話に過ぎるか）。しかし通要の齡は既に七十に及んでいる。盤珪の遷化が七十二歳であることから考えれば、盤珪と通要は同年かあるいは通要の方が年輩であつたかも知れない。大鼎は「しかも通要は進修懈らず。是れ賞すべくして、之を罪す」と、盤珪の態度にいささか不審の念を表明しているかに思われる。

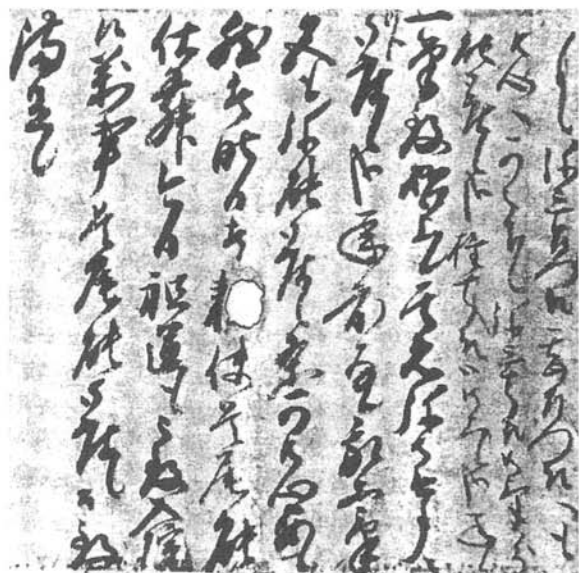
しかし大鼎はここで「蓋し為にする所有つて、以て然らしむるか」と思い改め、「皆病根に針灸す。其の自悔自懺して、以て大いに道念を増す。師の大悲心、心に銘し骨に鏤む。徳を感じて忘れず。其の機密、誰か敢て之を窺わんと、盤珪の不生の仏智の大慈悲に言及している。

## 二、禪岩文心

大分県東国東郡国東町妙心寺派安国寺に、未公開の盤珪の書状四通一巻が襲蔵されているが、それらの書状の一通の巻頭に以下の如き文章がある。

「一筆致啓上候。其元弥御無事に御座候哉承度存候。我等気色も弥能御座候条、可御心安候。然者昨日者勅使首尾能仕舞今日祖運も被致入院候。萬事首尾能御座候而致満足候。（以下略）」

書状の宛先は、盤珪の大檀越と称される網干浜田の豪商灘屋三兄弟の一人、佐々木十郎右衛門正意であり、書状の



末尾の日付「後ノ極月十八日」によつて、延宝五年（一六七七）閏十二月十八日に書かれたものとわかる。時に盤珪五十六歳。しかしながら書状に見える盤珪下の系字の祖の字を冠した祖運という弟子の名に心当たりは無いし、第一盤珪自身が妙心寺へ奉勅入寺したのが、これよりわずか五年前の寛文十二年（一六七二）のことに過ぎないのに、この年はやくも勅使を迎えて入院した弟子の祖運とは一体何者であろうか。はたまた輪命入寺した寺とはどの何寺であろうか。不審にかられて調べた禅僧祖運の生涯の軌跡が、以下に述べる拙文の主題である。

祖運（仮にこう呼んでおこう）は九州における山岳宗教、修験道の拠点として古くから知られる、豊前彦山権現の座主有清の子として、寛永十五年（一六三八）に出生している。父有清

は岩倉具亮の第二子で、幼にして彦山座主の嗣となり、長じて座主の娘と結婚、三子を設けている。長男亮有は彦山座主のあとを嗣ぎ、次子は権大納言中院通純の養子となり、新に愛宕家<sup>あたが</sup>を起した通福（一六三四〜九九）である。第三子の祖運は十一歳にして母を喪い、祖父の岩倉具亮に呼ばれて上洛、仁和寺法親王に仕えることになった。十三歳、菩提院某僧正のもとに投じて難染、密乗について習学を続ける。十九歳、別に教外の宗あることを知り、相国寺に錫を転じて晨昏修禪につとめた。しかし留まること二年にして祖運は、後に青蓮院門主となる幼少の尊証親王の補佐役として、親王の父、後水尾法皇に召され、青蓮院に入り、栗田口の定法寺に院室を賜つて尊証親王ともども天台教学

の深奥を探ることになった。祖運は後に栗田口定法寺の広助僧都として世に顕れることになる。

伊予の大洲の如法寺は、盤珪開創の寺として知られるが、同寺二世となった潜岳は、元は天台宗播州揖東郡斑鳩郷仏餉院の住職寂阿であり、つとに台教の義虎として名声を博していた。ある時郷人の勧めによって、近くの網干龍門寺の盤珪に参見、問答往返して遂に心服し、弟子の礼をとり更衣改名、祖量と称することになる。盤珪を輔翼すること年久しく、大洲藩主加藤泰恒の懇望によって如法寺に晋住、潜岳と号し名を祖龍と改めている。

この仏餉院寂阿がかつて比叡山に在った時、たまたま栗田口定法寺の広助（祖運）と同学であり、一所に勤めるところがあった。尊証法親王がつつがなく青蓮院門跡に任ぜられると、広助（祖運）は定法寺を退き、白鷗と号して遁世の日々を送ることになる。その頃旧知の寂阿の寺、仏餉院を訪ねることがあったようで、同院に白鷗の一偈が遺されている。

寂莫たり斑鳩寺 松林遠村に入る

翠蘿古壁に垂れ 緑樹高門を繞る

飛燕危楼に鬧ぎ 鳴鳩空殿に喧し

時に感慨の生ずる有り 佇立して吟魂を費す。

寛文九年（一六六九）のこととされる。

寂阿の勧めによつてか、あるいは寂阿とともに、その辺の経緯は定かでないが、白鷗（広助）も盤珪に参見しやがて改衣、ここではじめて盤珪より祖運と安名される。以後盤珪に従つて龍門寺・如法寺・地藏寺と所住を移し、お

よそ十寒暑を過ごすことになる。

丹波の大梅山法常寺は一絲文守開山の寺である。一絲（一六〇八、四六）は岩倉具亮の第三子で、先に述べた祖運の父、彦山権現の座主有清の弟に当たる。十九歳の時、横尾心王院の賢俊律師に就いて剃髪受戒、堺南宗寺の沢庵に参じ、後に愚堂東寔の法を嗣ぐ。後水尾上皇のご帰信殊に篤く、寛永十五年（一六三八）には西賀茂の靈源寺、同十八年には法常寺の開山となり、同二十年、江州永源寺の第八十世住持として住山するに至るが、正保三年、三十九歳の若さで示寂する。一絲の病篤しと聞こし召された上皇は、わざわざ医を遣わして診せしめられたという。上皇の宸憂は深かった。

法常寺二世として一絲の後を継いだのは、雪光文嘯『仏頂国師語録』の編者光頓であるが、雪光も寛文十二年（一六七二）遷化、法常寺は空席のままとなり、このことがまた後水尾法皇の宸襟を悩ますことになった。

一絲寂後三十年に当たる延宝三年（一六七五）、法皇は一絲の遺範を偲んでひそかに定慧明光仏頂国師と諡されるが、その二年後の延宝五年に、近衛基熙は、法皇の皇子に当たる妙法院亮恕、一乗院真敬、青蓮院尊証等各法親王、並びに円照寺の大通公主等と議して、一絲の俗姪に当たる祖運を、行業兼備の故を以って法常寺の後継者に推し、その由を法皇に奏上する。尊証法親王の補佐の役を長年勤めた祖運（定法寺広助）に対して、もとより法皇も異存のあろうはずはなく、直ちに祖運の俗兄愛宕中納言通福を勅使に仕立て、山科地藏寺滞留中の盤珪の許しを得て、めでたく法常寺入院の運びとなる。即ち一絲の法孫、知明淨因の法統を継ぐことによって、法常寺三世となった禪岩文心が、祖運その人であった。翌延宝六年は一絲の三十三回忌に当たり、新住持禪岩主宰のもと厳肅に法要が営弁された。法皇は靈源寺と法常寺を改めて勅願所と定められた。



当時、愛宕中納言通福の息女、源内侍の局は靈元天皇の寵を受けて第二皇子を出産し、皇子は二宮と称されていたが、延宝六年、仁和寺門主性承法親王（後水尾皇子）が示寂されるに当たって、その嗣として附弟となられた。八歳であつた。その翌年はまだ母源内侍の局と里御房におられたと思われるが、母につれられて山科の地藏寺を訪れ、はじめて盤珪に相見して親しく法要を聴聞し、深く帰依することになった。以後仁和寺門主寛隆法親王として、三十六歳で世を終わるまで、盤珪への帰信は続いている。（盤珪の語録の中には、この寛隆法親王に贈った偈頌二首も収録されている）。

俗弟祖運を介しての愛宕家一族の、盤珪への深い信仰の様子がうかがわれるが、当時の山科地藏寺には、源内侍の局をはじめ、靈元天皇のサロンの構成員の多くが参じて、盤珪の不生禪を聴聞している。靈元天皇の御用絵師であつた山本素軒もその一人で、素軒が盤珪の頂相を数多く描いているのも、そのような理由による。（盤珪自身についていえば、すでに寛文十二年（一六七八）六月二十三日、妙心寺二百十八世として奉勅入寺、即日謝恩参内して靈元天皇には対面している）。

法常寺に伝わる禪岩の伝記には誌されていないが、逸山祖仁編するところの『盤珪禪師法語』には、「後に禪岩、公家方徘徊せられ、師の許可もありしなどの風聞有て、師、義絶し玉ふ」と見える。禪岩は俗縁の岩倉、愛宕、中院及びその周辺の公家方を廻つて、時に盤珪の印可を得たと言うようなことを口外したのであらう、このことが盤珪の逆鱗に触れることになる。盤珪が禪岩を義絶したのは、およそ貞享三年（一六八六）の頃と推察されるが、法のためとはいへ、紫衣勅許の和尚をも断固義絶する盤珪の厳しい態度には、思わず息をのむ。

禪岩義絶後、愛宕家の方も自然に盤珪との法縁が絶たれることになる。地藏寺檀越の医師瀬尾宗寛は、かねて愛宕

通福とも昵懇の仲であったが、一日盤珪のもとに参じて愛宕家一族の困惑と苦衷の程を伝えている。再度『盤珪禪師法語』を引用してみよう。

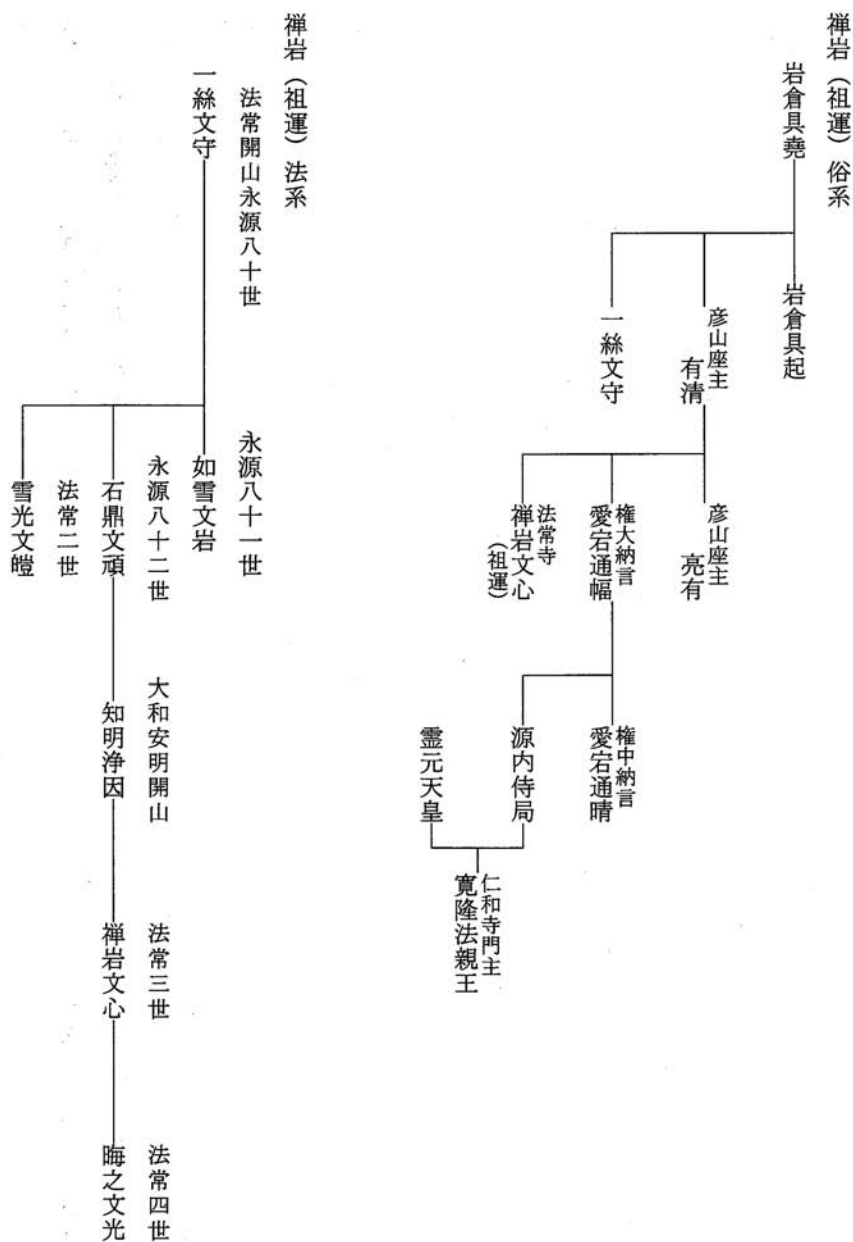
「禪岩義絶に付我等までも法縁断絶に及び嘆息限りなし。最早年より、兄弟とても禪岩一人也。何とぞ禪岩義絶有免あるに於ては有難く存すべし。然らば我等も再び法雨に霑ひ申すべし」

このような愛宕通福の哀切の心情を、瀬尾宗覺によって伝えられると、ようやく盤珪も點頭あつて禪岩の義絶は解かれ、盤珪と愛宕家一族との法縁もまた元の如く回復することになる。およそ元禄初年の頃と思われる。

盤珪示寂二年後の元禄八年（一六九五）の春、禪岩は開山一絲の五十遠年諱を嚴修の上、秋七月、法常寺を退隠する。法常寺四世の住席を継いだのは、高弟晦之文光であつた。晦之もとは豊前彦山二百五十坊中の一住僧であつたが、禪岩（祖運）の影響によるのであろうか、改衣転宗して盤珪の会下に参じ、久しく行業純一を以つて聞こえた。禪岩と出自を同じくし、更に同参の因縁によつて、召されて禪岩の弟子となつたのであろう。かくて法常寺には盤珪の不生禪に参じた彦山出身の禅僧が、二代にわたつて継席したことになる。

後に晦之は前住禪岩に先んじて宝永元年（一七〇四）に遷化し、禪岩は再び法常寺に復するが、宝永四年に示寂する。その辺のあわただしい経緯を述べるだけの余裕はない。

彦山大権現のことで拙文を終わりたい。享保十四年（一七二九）、靈元法皇の院宣によつて彦山は英彦山の美称を賜ふことになり、同十九年には更に法皇宸筆の「英彦山」の勅額が下賜されて、九州における英彦山大権現の勢威は、いよいよゆるぎないものとなった。そのことの実現に奔走した小倉藩の功績を、世の史家は評価するが、そのかげに彦山出身の愛宕家一族の強い意向の存したことも、忘れてはならないだろう。



追記

「禪岩文心」の一文は、曾て某氏の頌寿記念の文集に、「盤珪下の祖運」として投じたものであるが、引用の盤珪書状に一行分の脱落があり、誤ちを正して再度書き改めた。安国寺蔵の盤珪書状は、もと山科地藏寺（盤珪再興、現廃寺）旧蔵のものである。